

地域 ケアリンク

2

2016 Vol 18 No.2

特集

特集編集

京極 高宣

国立社会保障・人口問題研究所名誉所長
浴風会 高齢者保健医療総合センター長
全社協中央福祉学院学院長

第33回医療・福祉フォーラム「在宅医療と地域包括ケアシステム」基調講演

在宅医療と在宅介護の連携



あの人に
インタビュー

公益社団法人 成年後見センター・リーガルサポート
理事長 **多田 宏治**

エンドオブライフ・ケア協会

エンドオブライフ・ケア協会
理事 長尾 和宏

第4回

苦しみをキャッチして返すボール

相手の苦しみを「キャッチ」する

めぐみ在宅クリニックの小澤竹俊先生は講演のなかでよく「相手の苦しみをキャッチする」という言葉を使われる。この「キャッチ」という言葉の意味はよく考えると難しい。すなわち「もう死んでしまいたい」という心の叫びを、どのように受け止めるのかは想像以上の個人差があるだろう。同じ映画を観て泣く人と泣かない人がいるし、同じ音楽を聞いても感動する人としない人がいる。同じようにがんや難病という「病」に苦しんでいる人を見て、その苦しみを「キャッチ」する力は百倍単位で異なるものだと思う。

その「苦しみ」とは、「理想と現実のギャップ」

である。と小澤先生は説かれている。「現実」は第三者でもだいたい分かるが、「理想」はその人にしか分からない領域だ。よく理想が高いとか低いというが、かなり主観的なものなので単純に高低を論じられないはず。そんなきわめて主観的なものである「苦しみ」をキャッチするためには、どんな能力が必要なのだろう。もし感受性が低いのであれば、どうすれば高めることができるのだろうか。スポーツや芸術の才能のように、いくら努力しても限界があるのだろうか。

どんなボールを返すのか

仮に、相手の苦しみを上手にキャッチできた

としよう。しかしキャッチしただけでいいのだろうか。「傾聴」という言葉があるように一生懸命聴くだけでもとりあえず意味があるのだろうか。そんな疑問が湧いてくる。願わくばただキャッチするだけではなく、いいボールを返したい。ではどんなボールがいいのか。漫才のボケとツッコミではないが、できるのであれば上手なキャッチボールをしたい。でもどうすればいいボールを返せるようになるのだろうか。苦しみは主観的なものであるが、返す球も主観的なものである。しかしその主観的なもの同志の波長が合った時、共鳴が起こる気がする。それが信頼関係であり、医療の土台となる大切なプロセスではないだろうか。がっちりした土台を築くためには、医学の勉強だけでは無理で、

さまざまな人生経験とプロとしての経験の両方が必要になる。一朝一夕にはいいボールを返せない。

「もう死にたい」にどう寄り添う

若い時は「もう死にたい」と思う時があった。歳をとっても思う時がある。患者さんの中にも「もう死にたい」と言う人がいて返す言葉に窮することがある。

精神科医の名越康文先生は「どうせ死ぬのになぜ生きるのか」という著書を書かれている。先生は「答えは仏教の中にある」と書かれているが、私も同じ考えである。もちろん仏教だけに限らずキリスト教や他の宗教においても、この根源的な命題にヒントを与えてくれるからその宗教の価値がある気がする。

もちろん「どうせ死ぬのになぜ」ももしかしたらまだ死なないかもしれないし「の裏返しであり、」もう死にたい」は「もっと生きたい」の裏返しであろう。しかしこうしたふとした時に漏れ出てくる言語の裏に隠れたメッセージを嗅ぎ取る能力は、その人が育ってきた環境や教育によってずいぶん違ったものになるだろう。

う。様々な経験が豊富なことにしたことではないが、余裕もあることも大切であろう。そして柏木哲夫氏によると「寄り添う」とは、下からではなく横から支えることであるという。

言語と非言語的コミュニケーション

スピリチュアルペイン（霊的痛み）は目に見えないし言葉でも定義しにくい。では「そんなものは無いのか」と問われたら、それは絶対違う、と心えたい。それは私ごとで恐縮であるが、自分自身の中にも常にスピリチュアルペインを感じているからだ。月に何度かはスピリチュアルペインに押しつぶされそうになる弱く情けない人間である。きつとみなさまの心の中にも大なり小なりペインは普段からあるのだろうが、そこそこ幸せだと感じているのであれば、強く意識することは無いということだけなのかな。

スピリチュアルペインは人間だけとは限らない、と思う。犬にも猫にもある、と言えはぎつと犬や猫を飼っている人なら同意するだろう。生けとし生きるものには、何らかの痛みがあるのではないかと考える。だから蚊を叩く時でも罪悪感がある。魚や肉を食べる時も同様だ。

こうした痛みに応える手段として我々人類は「言語」を有している。だから一番便利な言葉という道具を用いて痛みを緩和したり慰めたりしている。しかし言語を持たない場合、あるのは「行動」のみである。触る、動く、祈るなどで表現するという方法、言葉以外の方法で痛みを和らげることができる。そして心を通じ合わせることも可能だ。名作映画「ダンス・ウィズ・ウルブズ」に描かれていたのは、まさに非言語的「コミュニケーション」であった。もし言語的・非言語的の両面から痛みを緩和できれば素晴らしい。それが、「痛み」に寄り添う」という意味だと理解しているが、いかがだろうか。

【講座開催日程】

1/30-31：仙台、2/20-21：東京、2/27-28：大阪、4/9-10：横浜、4/16-17：札幌

エンドオブライフ・ケア協会
03-6435-6404

URL : <https://endoflifecare.or.jp/>
E-mail : info@endoflifecare.or.jp